鳩の使いの旅

広島のこころを世界へ

黒川万千代

鳩の使いの旅

広島のこころを世界へ

黒川万千代

新日本出版社

黒川　万千代（くろかわ　まちよ）
1929年東京生まれ
被爆者 平和運動家
主な編著書「原爆の碑——広島のこころ」（新日本出版社）
「アンネの日記への旅」（労働旬報社）

鳩の使いの旅——広島のこころを世界へ

1988年6月20日　初　版©　　定価 1300円

著者　黒川万千代
発行者　山本　切

郵便番号 151　東京都渋谷区千駄ヶ谷4－25－6
発行所　株式会社　新日本出版社
電　話　東京（423）8402（営業）
（423）9323（編集）
振替番号　東京　3－13681
印刷　亨有堂印刷　　製本　飯塚製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします．
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください．

ISBN4-406-01643-0　C0095

鳩の使いの旅

目　次

原子野の中から……5
峠三吉とのふれあい
おんぼろビルの青春……45
石母田正先生との出会い
働く人の町の中で……72
川労協の秋場栄一さんの思い出
人間ってすばらしい！……84
菅野君を変えた砂川の闘い
平和をめざす豆タンク……92
看護婦の久保よしみさんのこと
育ちゆく若い力……103
闘病と女性史研究会のころ
被爆者の本当の苦しみ……120
原爆被災者の会の仲間、清水正勝さん

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

被爆者運動のサムライ ……129
ちょんまげ姿の尾島良平さん
外国人被爆者の救援を ……148
一朝鮮人少女の軌跡
パルチザンから市長へ ……161
シチリアの元市長ジャコモ・カニエス氏
王女の生まれを捨て共産党員に ……187
イタリアの反核画家バルバラさん
モスクワで反核を訴える ……207
正教会ピーメン総主教の招き
レジスタンスの伝統 ……227
「神を信じる人」も「信じない人」も
あとがき ……245

装画　バルバラ・ビリエーリ「平和の樹」（部分）
広島市所蔵
撮影・竹森隆則

原子野の中から

峠三吉とのふれあい

「富永嬢はまだほんの小娘……」と峠三吉は日記に書いています（一九四六年三月三十日付）。この〝ほんの小娘〟とは四十年あまり前の私のことです。当時十六才、広島女子専門学校に在学していたまだ幼さの残る私でした。

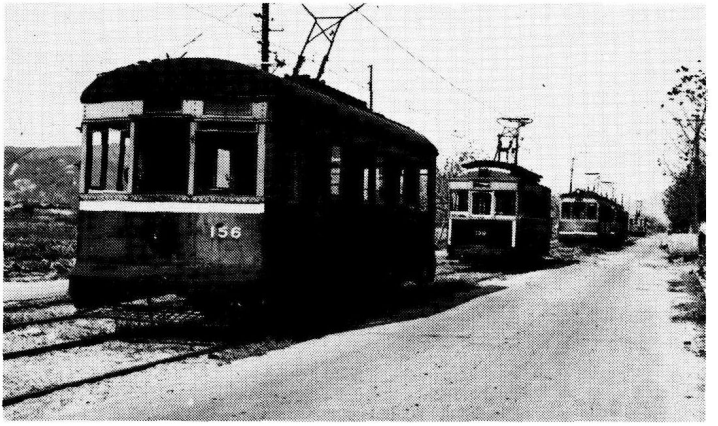
今、峠日記（青木書店刊『峠三吉作品集』下）を読み返してみると、焼け跡の広島で送った青春の日々が次々とよみがえってきます。手探りで探し求めた〝道〟、この道を求め迷い、たゆたいながらもひたむきに歩んだ私たちの姿が浮かんできます。〝ひとすじの道〟をつかみながら短い年月に生命の炎を燃焼させつくした峠さんは、私たち青年にとって本当に良い先達でした。

焼け跡に生まれた青年の会

彼との出会いは一九四五年初冬の頃です。七十五年間は草木も生えないといわれていた広島の焼け跡、原子砂漠と呼ばれた荒れた広島にも、そろそろ緑がよみがえってきていました。焼けた樹から緑の芽がふき、焼け土には雑草が芽生えて来て、被爆者よ希望を持てと語りかけているようでした。

原爆で倒壊したり、大破した校舎。子どもの歌の文句ではありませんが、〝雨が降ったらお休み〟するしかありませんでした。ガラスなどないまま窓から吹き込む風と雨、天井からはポタポタなんてなまやさしいものでなく、ときにはザンザと雨漏りしてきました。自分の家だって似たようなものです。朝、目が覚めたら枕もとの着替えに雪がうっすら積もっているのでした。

広島は中心部は原子砂漠といわれる赤黒い焼け跡が広々と拡がり、その中にポツリポツリとバラックや焼けトタンの小屋が点在していました。そしてその瓦れきのひろっぱ（直径約六キロある）を取り囲むように半ば壊れた家が縁取りのようになっていました。私の通っている学校からも私の家からも近い、やはり半ば壊れた家で開かれた〝集まり〟に出たとき、そこに峠さんも出ていたのです。



原爆で焼けた電車は引き込み線に集められ放置されていた．中には白骨がそのままで，暗くなると蛍光を出して人びとを怖がらせた．今から考えると放射能と思われる（1946年頃）

〝集まり〟といっても何とか集会、何とか学習会などというものでなく、「日本再建、日本民主化のために青年が何をなすべきか」議論しよう、という会でした。

集会とか学習会とかが厳しく禁止されていた戦前戦中に成長した私たちはそういうものを全く知らずに育って来たのです。解禁された、それやろうといってもどうやるのか知っている人なんて周りを見回したっているはずもありません。学習会に出るのは生命がけ、デートだって禁止されていたのが天皇制のもとでの日本国民でした。まさかと思われるかもしれませんが本当の話です。

そんな状態でしたから、その集まりでも議論好きの学生たちが方言にドイツ語の片言をまじ

えてわめいていました。八畳の部屋はぎっしりの人。広島高校、高等師範、高等工業、医専、文理大（今は全部広島大学）、帰省中の京都大学や九州大学の学生もいました。

部屋の隅に、背を丸めひっそりと座っていたのが峠さんでした。小さなちょびひげと穏やかな説得力ある話し方、私たちは多分どこかの学校の先生なのだろうと最初思っていたくらいです。ひっそりと座っているのですが、自然に彼は座の中心のようになってゆきました。彼はなまりはありますが標準語で、方言まるだしでわめく青年たちとは際立って対照的でした。不思議な魅力があり、人をひきつけるのでした。その言葉のはしはしに見える、知性と教養。私はすっかりこの会合に引きつけられました。そして、後に広島青年文化連盟に発展してからは当然のように入会したのです。

当時、女の子が男の人と一緒に会合に参加するのは珍しく、「非行」として見られていました。それは、会合の内容というよりも、男女が同席することそのものが「非行」だったのです。

私は青年文化連盟に友達を次々に誘いましたが、まず相手にされないばかりか「私をそんな〝ぼんくら〟（広島方言で非行少年のこと）と思っているの」と怒る人もいたくらいです。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

真面目に育って来た私がこんな大胆な行動に出たのは敗戦のショック、そして再開された学校での教師の変身に怒りを感じたためです。この間まで「鬼畜米英」といい、「日本は神の国」、「アメリカは下賤な者が大統領になるゲスな国」といったその口でこんどはアメリカ崇拝を説くのですから、若い私が深刻に悩んだのは当然でした。

大人たちは戦争の時のことは忘れたかのように、「民主主義」「文化国家」というばかり。平和国家をいいながら、あの殺人兵器についていわないばかりか、被爆者は平和に貢献した、きのどくな被爆者は平和のいしずえ、とまでいう始末。いくらなんでもひどすぎる、私の心はもやもやしていたのです。

大人たちへの不信、支配者への怒り、政治への疑問。私は毎日考え込むのでした。

あの日、私は……

一九四五年八月六日、それはまさに運命の日でした。空襲警報もなく、被爆したという自覚もないまま私は被爆者にさせられてしまっていました。

私は十六才、広島県立広島女子専門学校（現在広島女子大学）の一年生、たった十六で と不思議に思われるかも知れませんが、戦時特別措置ということで、大学、高校などに

つづいて中等学校までも在学期間が短縮されたためでした。
そのうえ入学も延期され、突然登校を命じられたのは七月の末でしたが、空襲の危険のため式を行なうことも禁止されたという異常な時でした。登校第一日、級長の紹介（任命です）が行なわれているとき、グラマン戦闘機の襲撃をうけました。何と航空母艦にのせられている飛行機です。日本は制空権も制海権も失っていたのです。もう戦争に勝つなんて、よほどの〝神がかり〟の人でもないかぎり考えられないようになっていました。
米軍上陸ももう時間の問題となっていると誰も心ひそかに覚悟させられるそんな状態でした。入学第一日を機銃掃射で迎え、そして授業を二週間足らずしただけで工場へ動員命令が出ました。八月六日、突然変更になってその日、登校日になったのです。
連日連夜のグラマンとB29の襲来でくたくたに疲れた私は六日の夜明け方すこし寝ただけで警報の解除と共に学校に向かいました。八月六日月曜日、朝から晴れ上がり暑い日でした。
最後の登校なので、朝礼では校長の精神訓話がありました。
「日本は神国、天皇陛下は神様です。敵が上陸したら神風が吹き、敵兵を太平洋に吹き

16才になって間もない私です．1944年広島に移住，7月から広島県立第二高女に編入しましたが，その日から工場で働かされました．工場内の湿気と高温，そして長時間労働のため身体をこわし，託児所勤務となりました．この赤ちゃんはカッちゃん．お父さん戦死のショックでお母さんのお乳が出なくなり，一日中ピーピー泣いていたのでいつも抱っこしていました．この託児所は原爆で倒壊し，大勢の犠牲を出しています．屋外で写真を撮ることは憲兵隊に禁止されていて許可が必要だった広島で，これは本当に奇跡的な写真です

とばす」といった神がかりの話でした。校長は数学者として知られた人で教科書など書いていた人です。仮にも科学者がこういうことを言わされる、何と情けない時代だった事でしょう。しかし、その話が終ってすぐ「神風」ならぬ「爆風」が襲って来ました。

突然、北側の窓が光り輝き、室内に白い光が流れました。冷たい輝きでした。そしてあっと思う間もなく真っ暗に……。どの位たったでしょうか、下敷きになっている、早く出なくてはと気がつきました。光がいくつもの束になって差しこんで来ています。それをめざし、かきわけくぐり抜け、いつか私は外の地面をふんでいました。目もくらむような真夏の太陽はかくれ、さわやかな風が吹いていました。そのとき、空にはあのキノコ雲がひろがっていたのでしょうが、私には記憶がありません。もしかしたらキノコの笠を下から見ていたのかも知れません。

「日本は神国ですぞ、天皇陛下は神様です。空襲なんかじゃありません。ガスタンクの爆発です。静かに！」心理・倫理の若い教授が大きな声を張り上げていました。今いうとおかしいのですが、私たち十六〜十八才の少女たちがパニック状態にならないですんだのは、この一言でした。幸いに重傷者はごく僅かでした。

しかし、そんなガスタンクの爆発などという生やさしいものではない。私たちは口に

はだしませんが（先生の命令は天皇の命令、疑問をもつのは非国民でした）、おかしい、これは多分校舎が直撃されたのだ。空襲警報もなかったけれど……と思い、私は心の中で自分の幸運にほっとしていました。

みると、本部棟はいくらかましですが、東西に四棟並ぶ教室棟は惨澹たる有様、そして広いグランドの南端に立つ県立第二高等女学校はまるで踏みつぶされたようなつぶれ方。私は呆然と見ていました。

「塀がない！」誰かがとんきょうな声をあげました。そうか、それで外が見えるのか。キャンパスを囲む高い頑丈な塀はバラバラに壊れていました。そして、沼地と蓮根畑の向こうに見える家々はこれまたひどい壊れ方でした。蓮田の蓮の葉がしおれているのも不気味でした。

重傷者をタンカにのせて隣の陸軍共済病院へ運びました。

「この病院はもう使えない。直撃をうけたのだ。重傷者は市内の日赤へ行け。もしそこが一杯なら陸軍病院へゆけ。非常時だから民間人でも診てもらえるぞ」

若い軍医が叫んでいました。

「おいお前たち薬はやるからもっていけ、そこらをほじってみろ。それよりもお前ら、

看護婦宿舎が倒壊して、交替で帰った看護婦がいま生き埋めになっている。救出作業を手伝ってくれ。なに、ガラスがささっただって、そんなものケガのうちには入らん。戦争だぞ、戦場では手や足の一本位なくなったって戦うぞ、痛いなんていう奴は非国民だ！」

私はしばらく手伝っているうち、ひざが痛むのが気になってきました。そっとさわると、もんぺが固くゴチゴチしています。そっとまくりあげてみて「あっ骨が」、パックリ口をあけたひざに、白いものが見えます。もういけません、痛みは頭のてっぺんまでつき抜けるようでした。しかし「ケガしてます」なんていえる雰囲気ではありません。そっと後退りして要領よくこの場を逃げ出すのが精一杯。

学校へ帰り、学校看護婦（現在の養護の先生）の空本さんに頼んで赤チンをつけてもらいました。親切な彼女は「どこか人目につかないところで横になった方がいい」といってくれ、日赤へ行った人たちは市中火の海のため逃げ帰って来たと教えてくれました。（彼女は戦後、共産党常任活動家と結婚、きびしい冬の時代献身的に夫の活動をささえました。峠さんが彼らのことをよみこんだ詩「子よ！」は『詩集　にんげんをかえせ』〈新日本出版社刊〉に収録されています）。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co